

「炊事場」からみた日中戦争

—元陸軍伍長¹・杉浦右一インタビュー—

広中 一成

はじめに

本稿は、一陸軍兵士として日中戦争に従軍し、終戦後は中国で1年半あまり捕虜生活を経験した杉浦右一氏に対し筆者が行なった、戦争体験に関するインタビュー記録である。

杉浦氏は1917（大正6）年、愛知県南設楽郡作手村（現在の新城市）に生まれ、1937（昭和12）年、徴兵検査に甲種合格後、豊橋歩兵第18連隊兵士として南京に出征した。間もなく、戦闘で負傷したため帰国し、1939（昭和14）年8月、兵役を終えた。しかし、1941（昭和16）年8月、臨時召集を受けて静岡の歩兵第34連隊に入営し、さらに、1944（昭和19）年8月、遼陽に駐屯していた歩兵第242連隊²に転属した。同隊では衛生隊、鉄道警備隊に配属され、終戦時は長城線付近を守備する一個中隊に所属した。

日中戦争が終わると、杉浦氏はソ連軍に捕まり、1947（昭和22）年4月に日本に復員するまで、遼陽の捕虜収容所などで苛酷な労働を強制された。現在は自宅のある愛知県豊橋市で市民を集めて自身の戦争体験を伝える活動を行っている。

杉浦氏は戦闘中のけががもとで足に障害を負ったため、242連隊では行

1 杉浦氏の軍歴を証明する書類は現在残っていないが、『作手村誌』によると、杉浦氏の最終階級は陸軍伍長と記録されている（作手村誌編纂委員会編『作手村誌』、作手村教育委員会、1960年、530頁）。しかし、杉浦氏は自分が伍長に進級した記憶はないという。おそらく、戦争の混乱で杉浦氏に伍長進級が通知されなかったか、または、証言の中にあるように、復員後のショックで進級の事実が記憶から消えてしまったと思われる。なお、本稿では、杉浦氏の同意を得て、『作手村誌』の記録を正しいとみなした。

2 歩兵第242連隊は、1944年8月17日、満州第9独立守備隊歩兵第18大隊を基幹に現地編成された部隊で、錦県（錦州）周辺の警備にあたった（『別冊歴史読本第123号 地域別日本陸軍連隊総覧』、新人物往来社、1990年、92頁）。

軍を必要としない炊事係を担当し、毎日炊事場で寝泊まりしながら、野菜の仕入れから調理の準備、伝票の処理に至るまで炊事に関わるあらゆる任務を一手に引き受けた。

軍隊が戦争を続ける上で、兵士たちに三度の食事を提供する炊事係は、欠くことのできない重要な職務であり、それを経験した杉浦氏の証言は軍隊の実相をみる上で大変貴重なものといえる。また、捕虜収容所での体験も看過してはならない。

そこで、本インタビューでは炊事係の体験を中心に、杉浦氏に日中戦争でどのような経験をしたのか具体的にうかがった。

なお、本稿は2011（平成23）年3月16日と4月12日に豊橋市内で行った杉浦氏へのインタビュー（聞き手：筆者）をもとに、筆者が編集したものである。できる限り、インタビュー内容を変えないように努めたが、時系列が前後していたり、明らかに記憶が間違っていたりした部分は適宜改めた。また、インタビュー内の括弧は筆者によるものである。



戦争の体験談を語る杉浦氏（『中日新聞』2011年3月13日）。

1、南京に出征

——では、まず杉浦さんが兵隊になった頃のことからうかがわせてください。

杉浦右一（以下、杉浦） もともと、私の実家は林業と農業をやっていて、

日中戦争が始まった頃、私は家業を継ぐために岡崎（愛知県岡崎市）にあった学校に入って農地改良の勉強をしていました。そのため、私は兵隊になる気なんて全然なく、そもそも背が低かったので兵隊に合格するはずはありませんでした。

しかし、当時私の父親は作手村の村長で、たまたま一緒に宿に泊まっていた豊橋の歩兵第18連隊の司令官に「息子をよろしく」と頼んだらしく、昭和12年に私が20才で徴兵検査を受けたとき、私がその司令官の前に立つと「君は甲種合格だ。おめでとう」といわれました。家族から兵隊になったのは私が初めてだったので、父親はとても喜びましたが、母の悲しみは相当なものでした。

昭和13（1938）年の1月10日、私は初年兵として18連隊に入営し、4月27日にはもう華中に行って南京城に入りました。18連隊は南京を攻略した部隊ですが、すでにそのときに18連隊は残留部隊しか残ってなく、私たちはそこに合流しました。不思議なことに、1月に兵隊となったときには二等兵でしたが、2月にはもう一等兵となり、4月に南京に行くときには早くも上等兵になっていました。普通、上等兵になるには兵隊になってから少なくとも1年にかかるもので、なぜ私がそのように出世したのかはいまだによくわかりません。

私は昭和13年1月に初年兵として徴集されると、華中に行く前にまず豊橋の兵舎で訓練を受けましたが、それは厳しいものでした。朝は起床ラッパとともに起きて、点呼を受けたあと体操をしました。そして、朝飯をすぐ済ませると、吉田城内の兵舎から演習場のあった高師ヶ原までまず駆け足で行き、さらに二川（豊橋市二川町）まで行って訓練をやり、それが終わると軍歌を歌いながら兵舎に帰りました。これを1月から4月まで毎日やりました。繰り返し訓練が続いたので、兵隊になったときに体が弱かった人も、終わる頃には見違えるほど丈夫になっていました。

訓練の間、また訓練が終わっても初年兵のときは敬礼ばかりしていました。練兵場の中を歩いているときでも、風呂に行くときでも敬礼をしっかりとしなければ古参兵から殴られました。

3か月間豊橋で訓練をやり、4月に南京に行きましたが、それからしばらくは訓練をやりました。そのとき、私は初めて捕虜の虐殺というか、手

足を縛った捕虜を前に並べて、「前へ前へ」と命令されながら銃剣で刺す訓練をしました。これをやらなければ度胸がつかないとのことで、強制的にやらされました。嫌でも何でも、横を向いてでも突き殺さなければなりませんでした。そのとき、捕虜には目隠しすらさせませんでした。殺された捕虜は南京の大きなゴミ捨て場に全部捨てられましたが、翌日になると、中国人が全部回収して行きました。

——そのときの南京市内の状況はどうでしたか。

杉浦 南京は少し前に日本軍が占領したので、てっきりまだ混乱して悲惨な状態にあるだろうと思っていましたが、私が南京に入ったときにはびっくりするくらい落ち着いていました。恐らく日本軍が相当協力して治安を維持したんだろうし、そこでの18連隊の功績はとても大きかったと思います。

18連隊は南京にしばらくいたあと、揚子江の各地に出て行きました。最初の頃は激しい戦いがありましたが、それから戦いらしい戦いはありませんでした。揚子江の辺りには匪賊がいたので、潜んでいそうな各部落を回っていきました。そのとき、日本軍は随分悪いことをしたかと思います。日本軍がもうすぐやって来るという情報が部落に知れると、女こどもはみんなどこかへ逃げて行きました。

そうこうしている間に、南京の周辺は日本軍によって制圧されましたが、私はある部落での討伐戦に参加中、負傷してしまいました。残念ながらその部落の名前は忘れてしまいました。

——負傷したのはいつ頃ですか。

杉浦 ちょうどその年の9月頃だったと思います。雨期だったので、泥沼の中で戦闘をしながら1キロ進むのが精一杯でした。そのとき、敵の迫撃砲の破片を受けて足を負傷してしまいました。それでもそのまま行軍したため、泥の中で傷が化膿してしまい、ウジがわくようになりました。幸い、後方に赤十字がいたのでそこに急いで行って診断してもらい、上海の黒田病院というところに送られるとすぐ内地還送を命じられ、翌日には船に乗り、大阪の日赤病院に入院しました。そこで2か月ほど治療を受けると少し良くなったので、豊橋の高師ヶ原にあった陸軍病院に移されました。また、それからしばらく経ってから修善寺の吉野温泉で療養しました。その温泉は一般の旅館でしたが、軍隊が抽出したものでした。

療養後、昭和14（1939）年の8月に軍から現役満期を告げられ、実家に帰りました。でも、前年4月にみんなに旗を振られて出征したばかりで、もう内地の土は踏まないと覚悟を決めて出てきたものですから、帰るのはちょっと恥ずかしかったです。特に、私の父親は息子の中で初めて甲種合格した私に大変期待していたので、私としては生きて帰るのは忍びなかったです。

バスに乗って村まで戻って、バス停から家まで2キロの沿道を歩きました。すると、私を見つけた村中の人たちが私を迎えに来てくれて、それから学校の校庭で挨拶をしましたが、生きて帰りましたなんて言えず、お詫びをするしかありませんでした。しかし、生きているからには国のために何かしないといけないと思い、ある日、新聞で見つけた一件の国家試験を受けたところ運よく合格し、昭和15（1940）年の7月1日付けで実家近くの新城の職業紹介所に勤めることになりました。ちょうど、所長が京都帝大の法科を出た方で、仕事に関する法律についていろんなことを教えてもらいました。

2、炊事班員として

杉浦 ところが、昭和16年の8月2日、私のところに召集令状が届き、今度は静岡の歩兵第34連隊に入ることになりました。多分、また私の親父が司令官に頼んだのではないかと思います。私は足を悪くしていましたが、軍の事務くらいはできるだろうということで、召集されてしまいました。当時は大東亜戦争が始まろうとしていた頃で、奉公袋を提げて34連隊の兵舎まで行きました。軍からは内緒で行けといわれたので見送りも何もなく、毎日ひとりかふたりずつその部隊に入れられました。しかし、戦争中にも拘らず、34連隊に入ってもたいしてやることがなく、毎日鉄砲を担いでは、演習場の周りや安倍川の河川敷を走ったりしていました。恐らく、私は部隊の員数を合わせるために入れられたのでしょう。

——静岡の34連隊にいるとき、戦争がどういう状況にあったかは知らされていなかったか。

杉浦 いいえ、はっきりとは知りませんでした。私は静岡で3年ほど過ごし、

昭和19（1944）年8月に中国に再び行きましたが、そのときも戦争の状況ははっきりとはわかりませんでした。しかし、昭和19年になると本来兵隊になるはずのなかった丙種の人までも徴兵されるようになったので、何かおかしいとはうすうす感じてはいました。実は、私の兄が丙種で戦争が始まってからも徴兵されることはありませんでしたが、昭和19年夏に突然兵隊にされてしまい、間もなくサイパン島で亡くなりました。

——再び中国に出征されたそうですが、どこに行かれましたか。

杉浦 昭和19年8月、私は突然中国に行くよう命ぜられました。なぜかそこでも内緒で行くよう指示されました。静岡駅から有蓋貨車に乗って、どこかの港に着き、そこで大きな船に乗せられました。貨車に乗っている最中は外が全く見られなかったもので、どのルートで行ったのかは全然わかりませんでした。

大きな船が中国の港に到着すると、また列車に乗せられました。そして着いたのが満洲の遼陽というところで、そこに駐屯していた関東軍第108師団所属の歩兵第242連隊に入りました。242連隊には、私たち以外にも満洲で召集を受けた在留邦人も来ていました。私たちはみんな召集兵だったので、しばらく教育を受けていましたが、私は足が悪かったので戦闘には出られず、結局、作戦部隊からは離れて炊事の献立を作る事務を毎日やることになりました。部隊には戻らず炊事の部屋で毎日泊まって、献立に必要な食料を倉庫から出し入れする監視をしたり、不正があつてはいけなからと、仲間とふたりで野菜や米を調達したりしました。野菜とかは軍が契約している満人から納入していました。だから、鉄砲を担いで戦場へ行くということはしませんでした。

——食料調達のときにどういう不正がありましたか。

杉浦 軍は満人の一般商人と契約して野菜を仕入れていましたが、そのとき起きた不正というのは、野菜を納入してくる満人が仕入れ値を実際よりも高く書いて差額をくすねたり、持ってくる野菜の量を予定よりも暗に少なくして利益を得るというもので、私たちはそれを阻止するため、3人くらいで見張りながら毎日の仕入れを相当厳格に行いました。

そのように厳しい監視の下に仕入れを行っていましたが、それでも商人はたびたび私たちに賄賂を渡して不正をはたらこうとしました。心の弱い

兵士は賄賂をもらってしまうことがありましたが、私は賄賂をもらっては軍の威信を傷つけてしまうので、それだけは決してやらないでおこうと強く心に誓いました。満人から品物を受け取ったあとは、連隊本部の会計係がかかった費用を彼らに支払いました。

仕入れのときは随分と気をつかいましたが、それが無事に終われば炊事班はカロリーに気をつけて料理を作ればいいだけでした。カロリー計算はあらかじめ衛生兵が全てやってくれましたが、それに基づいて毎月の献立をちゃんと作らないと、連隊副官からサインをもらえませんでした。普通、献立作りは軍曹が担当しましたが、軍曹はそんなことなかなかできないので、慣れている私が代わりにやりました。

——料理はどのようにして作りましたか。

杉浦 まず朝飯ですが、調理のときに使う材料は前日のうちに人数分を炊事場に用意しておきました。そして、午前2時になると、各中隊から炊事当番となった初年兵がひとりずつ炊事場に派遣されてきて、献立表に従って料理を作りました。炊事場には一回で100人分くらい作れる大きな鍋としゃもじがあり、それらを使って毎回部隊全員分を調理しました。

——杉浦さんも調理に参加しましたか。

杉浦 調理を手伝うときもありますが、大体調理は当番に任せて、私は炊事場にある事務所で伝票の処理などをしていました。

——料理ができ上がるとどうになりましたか。

杉浦 部隊の兵士はみんな朝の5時に起きて、点呼を取ったあとに体操をして、それから朝の食事になりました。そして、午前7時になると、週番上等兵が「飯上げ」と大きく号令し、それを聞いた当番の初年兵が「飯上げに行ってまいります」とあいさつをして、各班のめし上げ当番が10人揃うと、週番上等兵が点呼をとって、整列しながら炊事場に朝飯を取りに来ました。整列するのは、もし途中で上官に会ったときに失礼にならないようにするためでした。彼らは炊事場で食事を受領すると、ただちに自分の班に戻って配膳の準備をしました。

自分たちの食事以外にも、当番は下士官の部屋に行って食事の準備をしなければなりません。下士官がまず箸をつけなければ、兵士たちはいくら目の前に食事が用意されても食べることはできませんでした。要領

のいい当番は、下士官の心証をよくするため、「下士官室に食事の用意に行つてまいります」と大声で叫んで、我先に下士官室に行って配膳をしました。

それぞれの班で食事が終わると、「食缶返納」といって、当番は食缶という食事の入った容れ物をきれいに洗い、炊事場に返納しました。だいたいその頃には8時の訓練が始まる時間になったので、当番は急いでその準備をしなければなりませんでした。

——慌ただしい朝の食事ですが、食事時間はだいたいどれくらいありましたか。

杉浦 1分か2分です。目の前に来た料理を一気に口にかきこんで終わりです。素早い人は、みんなの配膳が終わる頃にすでに食べ終わっていました。なんでそんなことをするのかというと、急いで外に出て訓練の準備をする、それを見た上官から褒められ出世に結びつくからです。

——昼食の場合も朝食のときと同じようなやり方ですか。

杉浦 同じような場合もありましたが、部隊が演習に行くときには、朝のうちに兵士たちの飯盒にごはんとおかずを詰めました。飯が多い少ないと兵士から文句が出るといけないので、飯盒に同じ分量だけ料理を入れなければなりませんでした。時折、上官がチェックをしに来ましたが、分量に偏りがあると一からやり直しを命ぜられました。

——炊事場ではどんな料理を作りましたか。

杉浦 家庭で作るものとほとんど同じで、日本人の口に合うものでした。朝はご飯とみそ汁、昼は煮物のようなもの、夜はカレーなどです。でも、どうしても自分の食べたいものをよく作ってしまいました。作業は存外楽しかったです。

炊事をやっていたせいで、たまに中隊の将校がやってきては、私みたいな一兵士に砂糖をねだってきました。私は料理に使う分から一部だけあげました。料理の中に入れてしまう砂糖なので、少しの分量を将校に分けたところでばれることはありませんでした。本当はそんなことはしてはいけませんでした、それくらいはしょうがないと思ってあげました。これは軍隊の中のひとつの「助け合い」でした。

——そういう生活ができるということは、遼陽は比較的治安がよかったということですか。

杉浦 それはよかったです。遼陽は日露戦争以来治安は問題ありませんでした。事故もありませんでしたし、共産党のゲリラもいませんでした。兵隊が日曜日に外出しても、普通の人と何も変わりませんでした。

困ったことといえば、冬のトイレでした。大便をするとみんな凍ってしまいました。満人がそれを壊して持って行ってくれましたので助かりました。あと砂塵も大変でした。いくら窓をきちっと閉めても、サッシがなかったのだから中に入ってきました。外に出たら一寸先も見えず危険でした。

——献立を作る以外に炊事班ではどういう仕事がありましたか。

杉浦 炊事のときに伝票を書かないといけませんが、普通下士官はそんなもの書けないので、私が手伝いました。あと、各部隊に配る支給品の管理をしました。例えば羊羹なんかは一度に何百本という数を支給しましたから、それを管理するのが大変でした。

——その羊羹は日本から送られてきたものですか。

杉浦 いいえ、朝鮮で作ったものです。存外固くて評判がよかったです。あと、キャラメルやまんじゅうもありました。それらお菓子は炊事班から各部隊に支給しました。また、正月とか特別な日にも甘いものを料理につけました。

——中国人が作ったものは支給しませんでしたか。

杉浦 それはありませんでした。中国人が作ったものはやはり何か気になるので、仕入れませんでした。

——遼陽にはいつ頃までいらっしゃいましたか。

杉浦 そのことについては、ひとつ大変な目に遭ったエピソードがあります。242連隊には一個中隊の中に10人くらいの召集兵が編成され、私は第三中隊に配属されました。その中で人事関係の仕事は曹長がやっていましたが、私の10人の仲間のひとりが、曹長の人事に不正があるとして、曹長の首もとに銃剣を突き出して抗議をしました。急な事態だったので、ほかの仲間はそれを止めることもできず、大変なことになったと思うしかありませんでした。このとき、私は炊事場にいたので、もちろん何が起きたか全くわかりませんでした。

曹長を脅したその仲間は、事件後ただちに重営倉に入れられ、憲兵隊は

彼を軍法会議に回しました。そして、彼を止められなかった私たち9人は当分の間進級なしということになりました。連帯責任とはいえ、ひどいものです。それからすぐ、私たち9人は242連隊の衛生隊に配置換えさせられ、またすぐ満鉄の線路を警備する部隊に移されました。さらに昭和20(1945)年4月、万里の長城から北に10キロメートルくらい離れた部落に駐屯していた一個中隊に転属しました。その中隊でも私は炊事を担当しました。献立作りのほか、最後の清算までしたり、書類を大隊本部に送ったりもしました。私はその中隊の部隊長や将校たちのお世話になりましたが、なぜか彼らの名前や中隊の部隊名を今何も思い出すことができません。転属を繰り返された衝撃が大きかったのでしょうか。

——その中隊での生活はどうでしたか。

杉浦 万里の長城の部隊にいたときには、ひとりの中国人の通訳を採用し一緒に生活をしました。通訳がいないと現地で野菜の調達などができませんでした。

——どのように野菜を調達しましたか。

杉浦 その通訳と一緒に近くの部落に行って野菜を売ってもらいました。その部落の村長が案外いい人で、村長が部隊に遊びにくると、私たちはお酒を出してもてなしましたし、私たちが部落に行くと、村長はご馳走を出してくれました。村長の家にいる間、私たちは何人もの部落の住民と会っていろいろな話をしました。そういうことを何回も繰り返しているうちに、だんだん部落の人たちとうちとけてきて、何かあると私たちに協力してくれるようになりました。

——部落に行ったら何か危険なことはありませんでしたか。

杉浦 すでにある程度討伐が成功していましたし、通訳があらかじめいろいろ情報を持ってきてくれたので危険なことはありませんでした。敵部隊との戦闘もそれほどあったわけではなかったので、余った爆弾を川に向かって投げて爆発させ、それにびっくりして浮いてきた魚を捕まえて料理の材料にすることもありました。捕まえた魚は生では食べられなかったので干物にしました。

——野菜を調達するときにお金を払ったと思いますが、そのときはどのような種類のお金を使いましたか。

杉浦 日本円を使いました。それをもらった中国人は喜んでくれました。

3、収容所生活

杉浦 それからしばらく中隊での生活が続きましたが、戦争が終わる前日の8月14日、「明日、ソ連と戦闘を開始するので、全員私物は一切焼却しろ」との命令が出たので、糧秣とか調味料がいっぱいありましたが、油をかけて全部火をつけて燃やしてしまいました。そして、15日にみんな揃ってその地域を出発しました。そして、万里の長城の下まで貨物列車で来たら、天皇陛下の玉音放送があると耳にしましたが、私たちがそれを聞かないよう、軍はその放送を流しませんでした。

私たちはソ連といつでも戦闘ができるよう列車の中で銃に実弾を詰めて準備をしていましたが、遼陽まで来ると、いきなりソ連兵が私たちを囲んで武装解除されました。私たちはソ連と戦うつもりでいましたので、何が何だかわけがわからなくなりました。

ソ連兵に捕まった私たちは捕虜収容所に入れられました。そこで普通に捕虜生活ができればよかったのですが、気温が零下20度から30度、ひどいときは40度くらいまで下がり、その中で仕事をさせられました。

——どこの捕虜収容所に入れられましたか。シベリアに送られましたか。

杉浦 いいえ、遼陽にあった捕虜収容所に送られました。その収容所は以前、日本軍がソ連兵を収容するために建てられたもので、そこに私たち全員が入れたわけですから。一般の市民はその昔日本軍がそこでソ連兵を虐待したように、捕虜収容所に入れられた私たちも同じようにソ連兵に殺されるだろうと言っていました。でも、私は戦地で落とすはずだった命をなくしても惜しいとは思わなかったのです。殺されてもさほど問題ないと思っていました。

——その遼陽の収容所はソ連が管理していたものですか。それとも中国が管理する収容所でしたか。

杉浦 ソ連³です。中国軍はいませんでした。遼陽では中国側との関係が

3 実際はソ連ではなく国民政府の捕虜収容所と思われるが、本稿では証言のままとした。

存外よく、日本人も中国人もみんないい生活をしていましたが、ソ連がそこにやってくると、そこら辺にある物みんな持って行ってしまいました。——収容所ではどのような生活を送りましたか。

杉浦 収容所に入った1日目は休養させてもらい、次の日から作業が始まりました。作業はそれぞれ各地区に分かれて、平らな所にテントを張ってやりました。決して建物の中には入れさせてもらえませんでした。そして、寝るときは毛布一枚だけ与えられ、テントの下で寝かされました。しょうがないので、テントの中に藁と作業のときに使ったセメント袋を敷き、布団代わりにセメント袋を掛け、さらに、シャツの中にセメント袋を縫い合わせて風を通さないようにしました。それでも、零下30度くらいになると、とてもじゃなく寒いので、ベチカを焚いたりして暖を取りました。そういう生活だったので、私たちの仲間の半分は亡くなりました。

また、食料も悪く、馬に食わせるようなコーリャンとか大豆を1か月分まとめてくれましたが、大豆だけを食べようとしても食べられるものではなく、大きな窯で大豆を煮て、それぞれに分けました。そして、みんなでどうにかして大豆を加工して食べようとしたのですが、1か月そればかりでは、とても食べられませんでした。でも食べないと死んでしまうので、私たちはやむを得ず、そこら辺にある草やソ連兵が捨てる白菜の根をみんな拾って、大豆と混ぜて一緒に食べました。もう汚いとかどうとかは言っていられませんでした。結局、青いものを食べなければ体がもちませんでした。

ときには、作業の工程でお米を整理することがあると、ソ連兵の目を盗んで米を懐に入れて持って帰りましたが、たくさん入ると腹が膨れて、検査のときにソ連兵にばれてしまうので、ほんのわずかだけ持ってきて、みんなで炊いておかゆにしたり、草の青いところを摘んでそこに混ぜたりして食べました。捨てられた物を食べたり、食べ物盗んで食べるなんて、私たちは乞食と一緒にでした。

私たちの収容所では、全ての捕虜が家屋には入れられず、テントの中で生活させられていたため、熱病がはやり、40度以上の高熱を出して次々と亡くなっていきました。その遺体は鉄条網の隅に泥をかけて埋めましたが、私たちは日本に帰れるのかどうかもわからなかったため、その仲間の形見

を残すこともしませんでした。

——遼陽の収容所には何年間いましたか。

杉浦 1年近くだったと思いますが、はっきりしません。遼陽の収容所にしばらくいたあと、私たちは中国国内を転々とさせられました。遼陽の次に行ったところは、地名はわかりませんが、田んぼのまん中にあった収容所で、私たちの住み家を作るという名目でレンガの建物を作られました。しかし、それができ上がると、その建物は私たちの家ではなく、軍隊の兵舎にされました。つまり、私たちはだまされたわけです。

さらに、そのあと、私たちは上海の収容所に連れていかれました。ご存知のとおり、上海は中国の一等地で郊外にはいくつもの豪華な別荘がありました。私たちが上海に着くと、理由はわかりませんが、その別荘の解体作業を命ぜられ、ダイナマイトを使って数軒の別荘を破壊しました。

次に私たちがやったのは、中国軍が作ったトーチカを撤去する作業でした。昭和12年8月、18連隊は上海に上陸し、トーチカに立て籠もっていた中国軍を打ち破りましたが、それはとても激しい戦闘でした。そのトーチカは周囲を鉄板で覆い、銃身だけが出るような穴が前方にあるだけでした。中国軍はその穴から機関銃を連射したので、18連隊は上陸するのになかなか難儀しました。やっと上陸してもトーチカからの攻撃が激しかったので、18連隊は夜間を利用してトーチカの死角に前進し、手榴弾や大隊砲を集中的に使ってトーチカを破ることができました。そういうトーチカを撤去するということですから、大変骨の折れる作業でした。

——結局、収容所で生活した期間は全部でどれくらいでしたか。

杉浦 およそ1年半です。ちょうど私は体が悪くなり、そろそろ運も尽きたかと思っていたところ、昭和22年の4月に乗船命令が出て、またどこかに連れて行かれると覚悟して船に乗ると、日本人が来て「あなたたちはもう内地に帰れますよ」と言われましたが、半信半疑でした。日本人がいくらそう言っても帰れるなんて信じられませんでした。すると、船が佐世保に到着し、検疫を済まして上陸することができました。収容所にいた2年間は一回も風呂に入っていなかったので、シラミから何から虫がいて体がとても痒かったです。

佐世保に着くと、前の店に海藻で作った甘い羊羹が売っていたので、私

は支給された250円を使ってそれを買って一生懸命食べました。しかし、そのお金は家に帰るための切符代や電報を打つための費用だったので、家には帰ることを伝えぬまま窓から汽車に乗り込みました。

豊橋に到着すると、一面焼け野原だったのでびっくりしました。遼陽では上層部が情報を握ってしまっていて、私たちは内地の状況が一切わかっていませんでした。豊橋は吉田城の屋根が少し残った程度で、駅からずっと焼け野原が広がっていました。そして、駅前では人々が天幕を張って闇市を開いたり、寝転んだりして生活をしていました。私は当時、豊川の海軍工廠の近くに家がありましたが、いままでの苦勞で頭がどうかして、自分の家が全然わからなくなり、家の前を何回も通り過ぎて一切気づきませんでした。ようやく自分の名前が書いてある表札を見つけて、初めてそこが自分の家だとわかりました。そのとき、家族は私の消息が一切わからなかったもので、私が突然帰ってきたのでびっくりしていました。帰ってすぐ、私は原爆が落とされた広島や長崎、空襲に遭った海軍工廠にお参りに行って、生きて帰って来られたことを感謝してきました。

帰ってから私は元の職場に戻って仕事を始めました。当時は非常に優遇されていて、召集を受けても給料はそのまま出ている、私が軍隊からもらっている給料を差し引いた額が実家に送られていました。当時は国そのものが面倒を見てくれていたわけです。

毎日職場に勤めるようになりましたが、戦争で頭がどうかなって字を忘れてしまい、文章すら書けなくなっていました。字が書けなければ役所では何も仕事ができず、1年間は文章の書き方の本を読みながらひたすら字の勉強をしました。実際帰ってみると、生きて帰って来るとは思っていなかったもので、とても恥ずかしかったです。

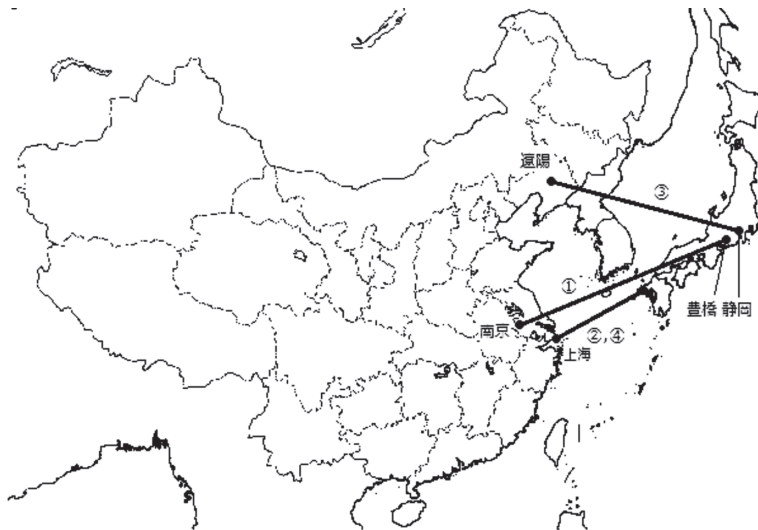
インタビューを終えて

2011年3月11日に発生した東日本大震災で日本国中が騒然とする中、杉浦氏には2回にわたってインタビューを受けていただいた。杉浦氏は今年で満94歳を迎えたが、記憶の明瞭さ、言葉の聞き取りやすさは、何ら年齢を感じさせず、インタビューの編集作業も非常にスムーズに進められた。

炊事場で過ごした杉浦氏の戦争体験は、これまであまり明らかにされてこなかった戦地での兵隊の生活の様子がみてとれ、非常に興味深いものといえる。また、賄賂に厳しくしたり、将校が砂糖をねだってきたりした体験は、史料を見ているだけでは浮かび上がってこない、軍隊内部の実相のひとつであろう。そして、野菜の調達を通して部落住民と交流するというエピソードは、駐在部隊がどのように現地住民と折り合いをつけていたのかという問題を考えるうえで看過できない。このほか、収容所での体験は、記録として残らないという点で貴重なものといえる。

杉浦氏の戦争体験が、これからの日中戦争史研究の進展にいくばくかでも貢献できればと願ってやまない。

杉浦氏の中国出征と復員の経路



①豊橋歩兵第18連隊兵士として南京に出征（1938年4月）。②戦地で負傷し内地送還（1938年9月頃）。③静岡歩兵第34連隊兵士として遼陽に出征（1944年8月）その後、歩兵第242連隊に編入。④捕虜収容所などでの生活を終え復員（1947年4月）。